

「他者意識・自己防衛」を意識した情報モラル教育に関する考察

— 情報化社会を生きる力との関連 —

戸田 和幸 (名古屋市立砂田橋小学校)
野崎 浩成 (愛知教育大学 情報教育講座)

Consideration concerning information morality education to consider “Others consideration and self-defense”

Kazuyuki TODA (Sunadabashi Elementary School)
Hironari NOZAKI (Department of Information and Computer Science, Aichi University of Education)

要約 ネット社会のトラブルは、『他者意識 (倫理)』と『自己防衛 (安全)』の欠如が引き金になっている場合がほとんどである。近年、学校は情報安全教育にチャット・メール・掲示板等の体験を取り入れ、効果をあげている。本研究では、『本名』と『匿名』の立場に潜む学習者の認知に働きかける違いと、『他者意識』と『自己防衛』の間に関係があるとした研究¹²³⁾に沿って、チャットを体験した学級と体験しなかった学級との情報安全に関する対処能力の違いを探った。併せて、学校教育という特別な環境で行う、『本名』と『匿名』の二つの立場のチャット体験が学習者の認知に影響を与え、「情報化社会を生きる力」につながる可能性を示唆していることを確認した。

Keywords : 情報化社会を生きる力, 本名と匿名, 他者意識 (倫理)・自己防衛 (安全), チャット体験

1 情報モラル教育

子どもを取り巻く環境は多様であり、情報化社会もその環境のひとつだといえる。これらの環境の中で子どもは生きていかなければならない。

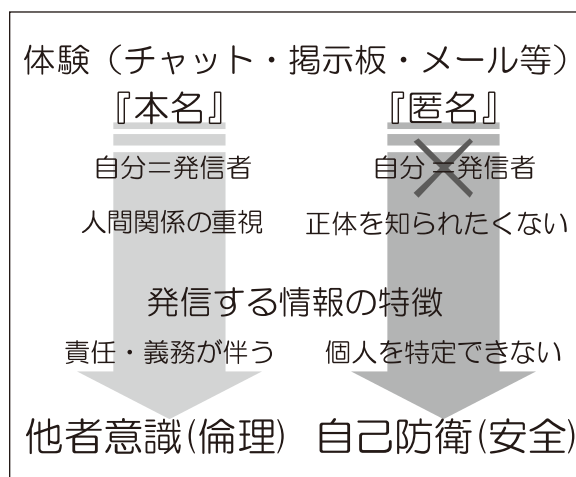
情報化社会には、光の部分のみならず影の部分も存在する。その影の部分をあえて学校教育で扱う必要はない、問題から遠ざけたところで教育を行おうという主張がある。これは、人権教育でいわれる「寝た子を起こすな」と同じともいえるのではないだろうか。しかし、寝た子はいつかは起きる。子どもは、早い遅いはあっても、いずれ情報化社会を泳ぐ日がやってくる。だとすれば、泳ぎ方や遭遇する危険の対処法などを学習しておかねばならないのではないか。そして、その教育の中心となるのは学校であろう。

情報モラルは、背景となる技術特性ゆえに、既存の日常モラルの範疇に収まらない部分がある。この技術は、過去の新聞や電話やラジオやテレビなどと同様、日常の技術となり、情報モラルが日常モラルに含められる日がくることだろう。だとすれば、私たちは、その日を見据えて情報安全教育を展開していく必要がある。情報モラルの内容は、その情報技術とともに変容していく可能性が高い。それに対応する教育は、最新の技術を追うことよりも人権感覚を磨くことだと考えている。

教師は情報化社会に詳しいにこしたことはないが、詳しくない教師が情報安全教育ができないわけではな

い。大事なものは「他者意識」と「自己防衛」の感覚、つまり人権感覚を磨くことである。これは、教育活動全般で指導している内容でもある。人権感覚を磨いておけば、問題を容易にキャッチすることができる。問題の解決法が見つからないときは、専門家に相談すればいい。今後、新たな技術の出現で、私たちが想定しえない事例に遭遇することもあるだろう。事例に遭遇したときに、気づき、的確に対処できることが、「情報化社会を生きる力」だといえるのでないだろうか。

2 チャット体験を取り入れた情報モラル教育



『本名』・『匿名』と他者意識・自己防衛の関連

ネット社会におけるトラブルの要因を大別すると、『他者意識』と『自己防衛』の欠如が引き金になっている場合がほとんどである。研究者が提案する情報安全教育もこの二つの感覚の育成が根底にある。そこで、『他者意識』・『自己防衛』と『本名』・『匿名』の間に関係が成り立つと仮定した研究¹⁾²⁾³⁾を受け、『本名』・『匿名』の二つの立場を使用したチャットの体験を「情報化社会を生きる力」につなげた。

3 チャット体験

3.1 対象

小学5年B組 23人 チャット体験有(6月前)

小学5年A組 24人 チャット体験無

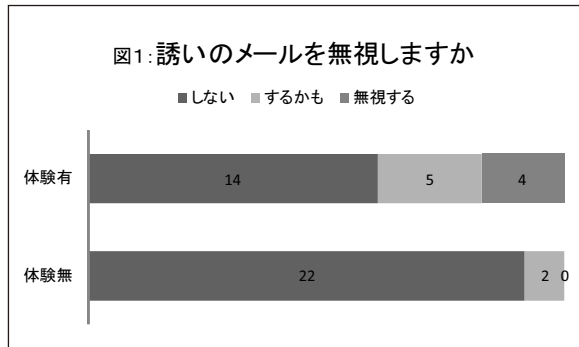
調査6か月前に『本名』・『匿名』の二つの立場を使用したチャットを行った直後の5年B組と行っていない5年A組との情報安全に関する対処能力の違いを探った。

3.2 効果測定

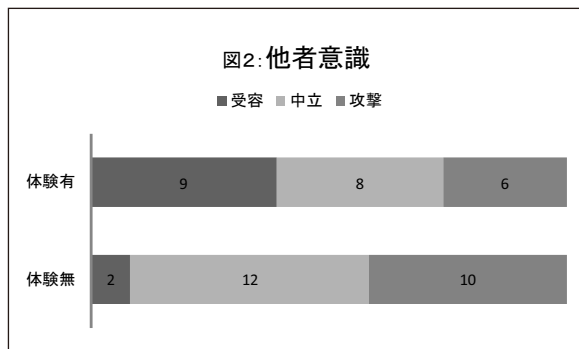
子ども自身が高校生になったと仮定し、事象に遭遇したときの行動を日記形式で書き入れたものを分類して違いを探った。

○ チェーンメールへの対応

友達がケガをしたことを連絡するメールを装ったチェーンメールに対しての行動について、体験有群はチェーンメールであることに気付き、無視するポイントが高く、体験無群は連絡をするポイントが高かった。体験は、チェーンメールに気付く力を身に付けることに寄与していると考えられる [図1]。



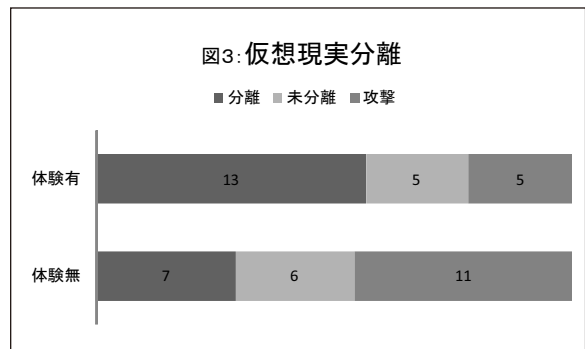
○ 他者を意識する



チャットをしている際に、相手から自分の気持ちを逆なでる返事を受けた場合の対応について、体験有群は冷静に受け止めるポイントが高く、体験無群は相手を攻撃する内容を書き込むポイントが高かった。体験を通して、チャットでは自己中心的な書き込みがあることを知ったと考える [図2]。

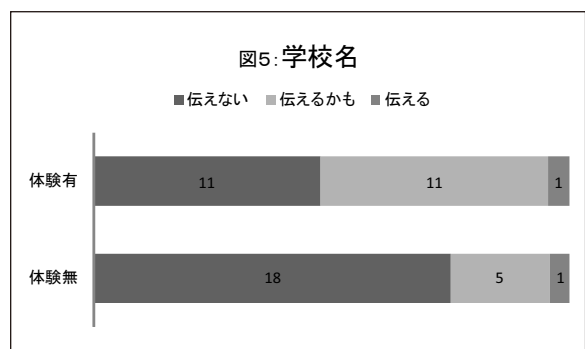
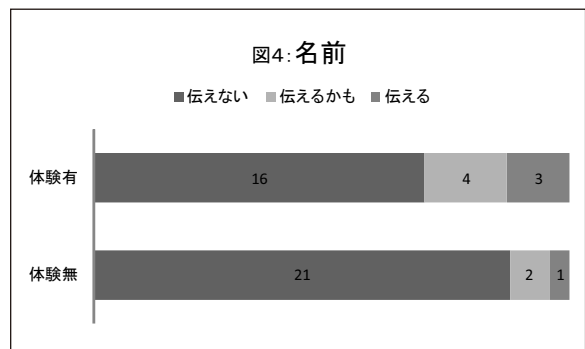
○ 仮想の社会と現実の社会との分離

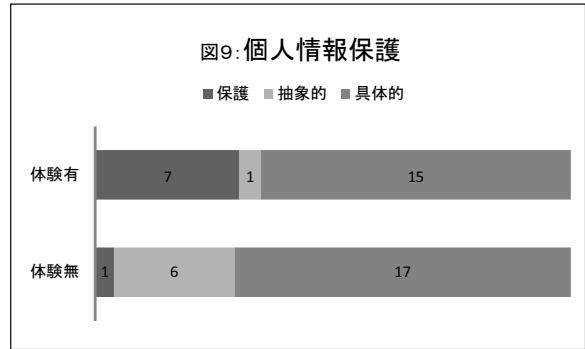
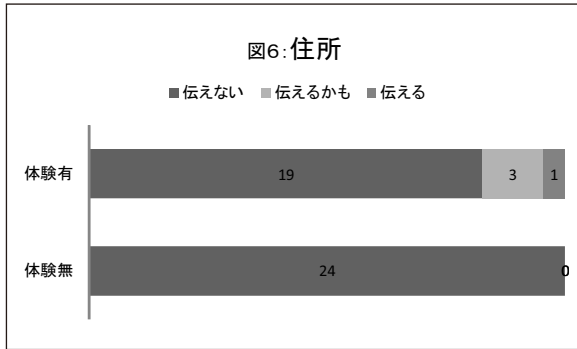
昨晚のチャットでトラブルが生じた相手と学校で会った時の行動について、体験有群は普段通りあいさつをするなどの仮想の社会と現実の社会を分けて考えるポイントが高く、体験無群は無視したり理由を聞いたりして攻撃的な態度をとるポイントが高かった。体験有群は、仮想空間と現実とは違う世界であることに気付いていると考える [図3]。



○ 自分の個人情報管理

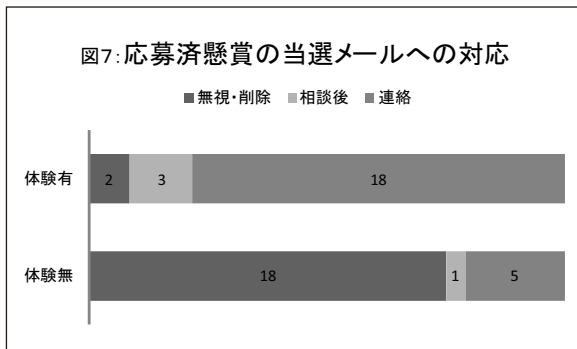
ネットを通して応募する際に伝える内容について体験無群は、名前・学校名・住所を教えないポイントが高い。この考察については4項で触れる [図4-6]。



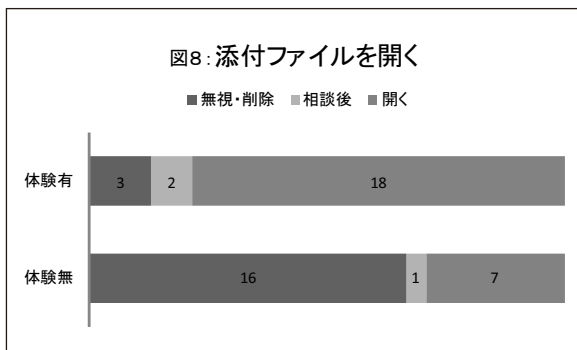


○ 他者との関わり

事前に応募した懸賞の当選メールを着信したときの対応について、体験有群は連絡するポイントが高く、体験無群は無視・削除のポイントが高かった。体験無群は、情報安全教育に触れたことがなく、情報化社会をマスコミから受けた情報のみで見ているため、活用できない状況に陥っていると考えられる [図7]。



当選メールに添付されていたファイルを開くことについて、体験有群は開くポイントが高いのに対して、体験無群は無視・削除するポイントが高い。体験無群は、他者とのかわり「応募済懸賞の当選メールへの対応」と同じように、情報化社会に取り残される懸念があると考えられる [図8]。

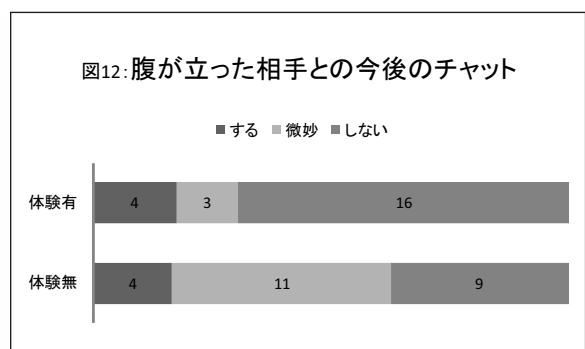
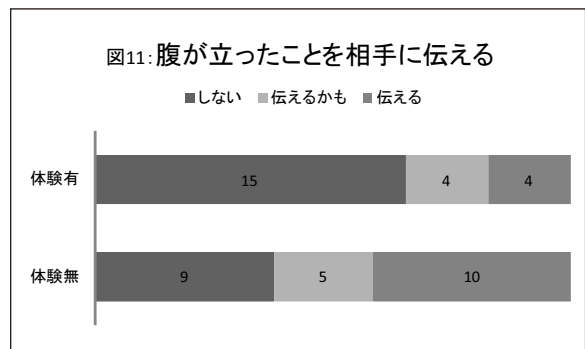
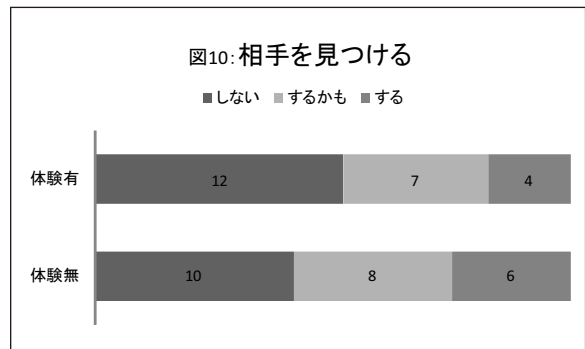


○ 他者の個人情報管理

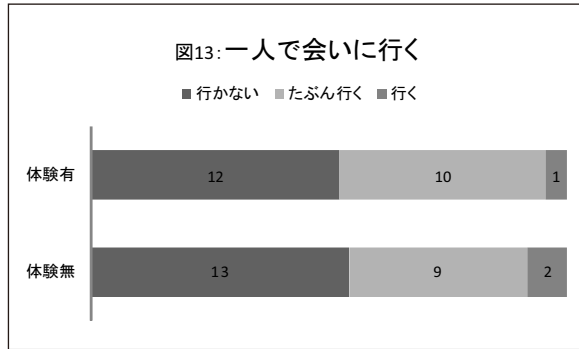
チャットをしているときに友達について聞かれたらどのような答えをするかについて、体験有群は個人情報保護を意識した記述が多いのに対し、体験無群は友達の個人情報の書き込みが多かった。体験を通して、個人情報を書き込むことがもたらす結末について推測ができるようになってきているからだろうと考えられる [図9]。

○ トラブルを回避する

チャットルームで出会った相手とトラブルが生じた際の行動について、体験有群は腹が立った相手を見つけないポイントがやや高く、体験無群は相手を見つけるポイントがやや高かった。体験有群は腹が立ったことを相手に伝えないポイントが高く、体験無群は相手に伝えるポイントが高かった。腹が立った相手との今後のチャットについて、体験無群は微妙と判断できないポイントが高かった [図10-12]。



チャットをしている相手に一人で会いに行くことについては、体験有無群ともにほぼ同じ結果であった [図13]。



体験有群は、家族や友達に伝えてから会う、友達と一緒に会いに行くポイントが体験無群より高かった。家族と一緒に会いに行くポイントは、体験無群が体験有群より高い結果となった [図14-16]。

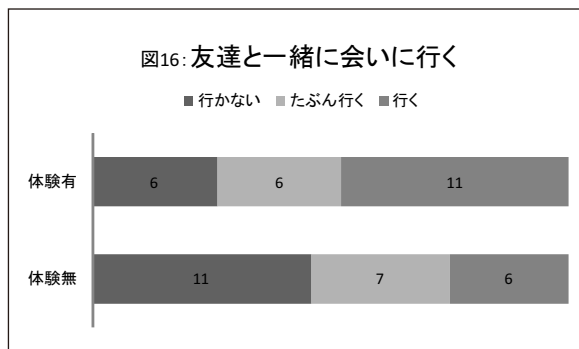
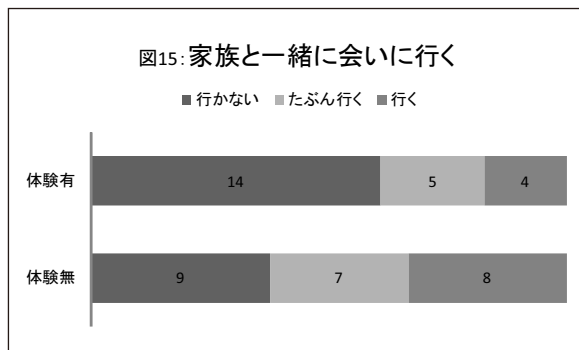
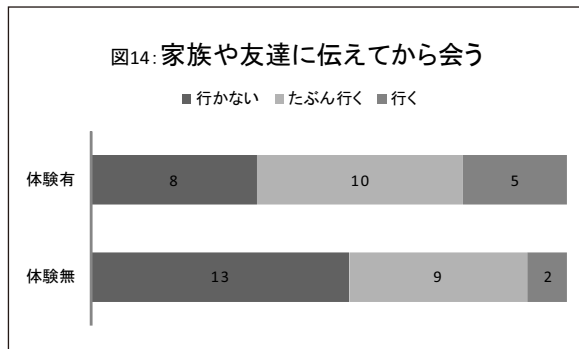


図1-16の結果から、『本名』と『匿名』の二つの立場を使用したチャットは、情報化社会の影の部分に遭遇した場合や遭遇しそうになった場合に回避する力を子どもに付けたと考える。しかし、図14-16に見られるように、チャットをしたことが情報化社会の影の部分の存在を薄くしたことも事実である。

慣れはスキを作り、ひいては情報化社会の影の部分を見落とす結果を招きかねない。情報安全教育は多面的・継続的に行う必要があるといえる。

4 自分の個人情報の管理

4.1 対象

小学5年B組 23人 チャット体験有 (6月前)

小学5年A組 24人 チャット体験無

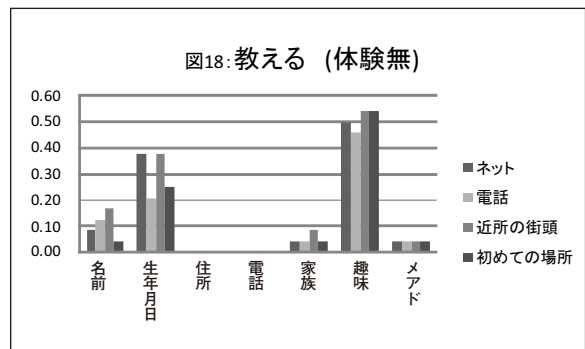
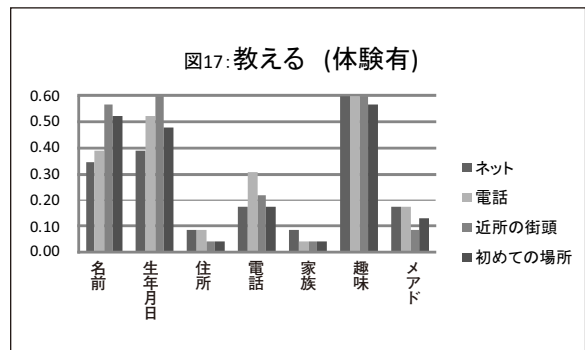
情報モラル教育を行っていない5年A組と、調査6か月前に『本名』・『匿名』の二つの立場を使用したチャットを行った5年B組との結果を比較した。

4.2 効果測定

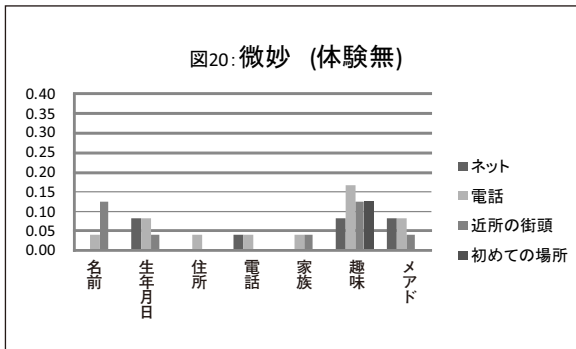
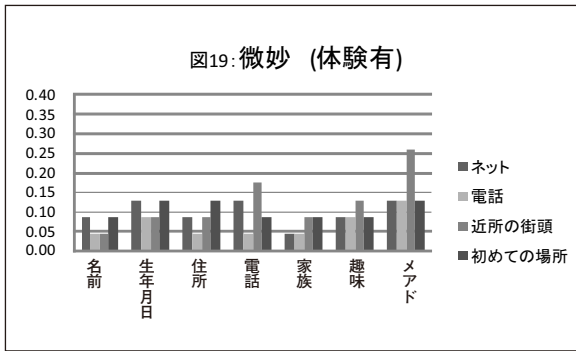
①ネット上で、②電話で、③近所の街頭で、④初めて行った場所で、知らない人からアンケートを受けたときに、「名前」「生年月日」「住所」「電話」「家族の名前」「趣味」「メールアドレス」を教えるかを答えさせた。回答は、「教える」「微妙」「教えない」から選ばせた。

○ 教える

体験無群は名前でさえ教えるポイントが10%程度である。個人情報保護に過剰反応している懸念がある。体験有群は、個人情報の管理に対して正しい判断ができる子どもが多いという結果であった [図17・18]。

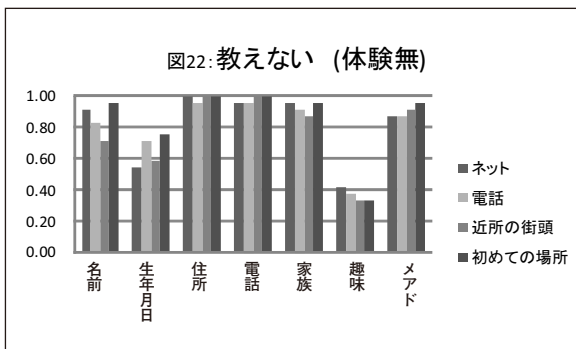
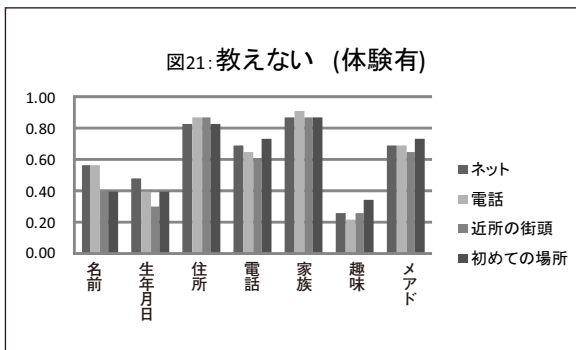


○ 微妙 [図19・20]



○ 教えない

当然ながら、教えるの逆の結果となった。体験無群は趣味以外の個人情報ほとんどの子どもが教えないという結果であった。過剰な個人情報保護は、情報化社会から取り残される可能性がある。情報安全教育を施すことにより、情報化社会を生きる力を付けることが必要であると考え [図21・22]。



5 まとめ

めまぐるしく変化する情報化社会に対応する情報安全教育を行うことは容易ではない。子どもがより良い情報化社会を築いていくには、学校で「守るべき、してはいけない」のではなく、「できるけれどもしない心と行動力を育てる」ことが大切である。「人を傷つけてはいけない。」「物を盗んではいけない。」などは、そのこと自体を教えられるというより、成長の過程で価値観が社会生活の中で自然に育っていくのではないだろうか。

本研究で扱ったチャットの体験は、情報安全教育の指導内容からトップダウン的に行うのではなく、子どもが体験を通して学んでいくボトムアップ的な学習である。ボトムアップ的な学習によって育てられた子どもは、ネット特有の攻撃性が外に出ようとする際に結果を推測し行動を抑制することができると思える。抑制においても、単純に自己を抑えるのではなく、脳で考え自然に行動できるようになると考える。

ゆえに、学校教育という特別な環境で行う、『本名』と『匿名』の二つの立場のチャット体験は、子どもの意識に潜む『他者意識』と『自己防衛』の感覚を磨き上げると考える。成長するにつれ、より磨き上げられるこれらの感覚は、ネット社会を「生きる力」につながることだろう。

引用・参考文献

- 1) 戸田和幸 (2006) 第22回全国大会講演論文集, 日本教育工学会
- 2) 戸田和幸 (2007) 第23回全国大会講演論文集, 日本教育工学会
- 3) 戸田和幸 (2009) 第34回全国大会講演論文集, 教育システム情報学会